

# 読売俳壇

## 高野ムツ才選

強霜の家に最後の一人吾れ

鎌倉市 中江 優子

【評】かつては大家族だった。さまざまな経緯があって一人になった。辛く寂しいことだが、心を立て直して前を向き生きよう。強霜という季語がそんな決意を伝えてくる。日脚伸び太陽近くなりけり

香川県 福家 市子

【評】寒中でも日差しが強く感じられる。そうだ、太陽が近づいてくれた。その実感を切字をゆったり用いて大胆に言い切ったことが成功。貧乏でもいいや炬燵でラジオきく

仙台市 加藤 祐子

【評】いろいろ苦勞があった。しかし、やがて、人生の大事は何か実感するようになった。投げやりのように見えてどこか自信あふれる。身震ひの音もしさうな大嘘

白井市 毘舍利道弘

しんしんと蚕時雨の村深眠り  
助手席に冬帽子置き出発す  
空いまだ夕日離さず浮水  
ごみ収集あとの清掃花辛夷

土浦市 今泉 準一  
東京都 奥村 和子

狂はざる電波時計や日脚伸び  
近道の畦でこぼこのまま凍てり

神戸市 吉野 勝子  
三原市 天崎 千寿  
袖ヶ浦市 浜野まこと

## 正木ゆう子選

音すれば音をめがけて霞ふる

西東京市 永井 康信

【評】一見すっきりした句なのに、解釈するとなるとややこしくて、惹かれる。当たれば音のする所ばかりを狙って霞が降っている、そんな気がするの。中七がユニークだ。薄水や朝の光にある希望

高松市 入田 葉子

【評】希望という言葉は、純粹過ぎて俳句になりにくい、この句の言っていることは真理だと思ふ。毎日遭遇できる、すぐそこにある希望。スノームーン対面したり夜明け前

大阪市 沢田 晃男

【評】一月の満月がワルフムーンなら、二月の満月はスノームーン。二日の未明が観測に適していたらしいので、わざわざ見られたのだろう。三度目で揃ふ紙束寒明けぬ  
焼餅の売れる入ってすく右手  
煮凝りとう黒曜石を割りにけり

東京都 稲垣みち子  
桐生市 杉戸乃ぼる

立春や煮卵の鍋揺する午後  
青空や鷹現れて完成す  
根元まで分け入る日差し竜の玉

東京都 松永 京子  
名古屋市 横井 昌義

スノーカーを萌黄に替へて春を待つ

三郷市 吉村 喜子  
東京都 岩崎 美範

## 小澤 實選

雪だるま雪に埋もれてしまひけり

青森市 小山内豊彦

【評】けっこう大きな雪だるまでも雪に埋もれてしまふ降りである。この雪ではもはや新たに雪だるまをつくる気持ちにはなれないだろう。青森の圧倒的な降雪が描かれた。我が誇り幸畑団地除雪隊

青森市 天童 光宏

【評】もう一句、青森の雪の句。この降雪にはひとりでは対処できない。団地には除雪隊が組織されていて、その仲間雪をかくのだ。冬薔薇元遊廓のカフェかな

八王子市 渡辺 まゆ

【評】元遊廓をリフォームして、カフェを開店しているというのだ。独特の雰囲気を楽しんでいる。生けてある冬薔薇は真紅だろうか。自然派のワインの微濁春の夜

東京都 森 一平

老犬と老婆の散歩土手青む  
トーストにのせ目玉焼き返る  
死亡欄に同級生や年の暮

習志野市 神鳥 文字  
神戸市 倉本 勉

弁当に三色団子春隣  
大楠の樹齡千年里の春  
掌にばしと福豆擱みけり

横濱市 飯島まゆみ  
岸和田市 宇野 京子  
横濱市 武井 保一

## 津川絵理子選

火の色の鯉を埋むる厚水

東京都 望月 清彦

【評】厚水の下に鯉の緋色が透けて見える。絵画のような美的感覚があり、「火の色」「埋むる」といった言葉の輪旋が緻細で的確だ。厚水に埋められた鯉の命が灯っている。艶話らしき笑ひや磯籠

東京都 天地わたる

【評】磯籠に集まる海女たちの話の内容は聞き取れないが、どうも艶話らしい。行きずりの光景を、鮮やかに切り取った。野性味がある。水中の根も美しや風信子

松山市 森岡 雅信

【評】水栽培のヒヤシンス。花はもろろん美しいが、根もふさふさとして見事だ。敢えて「根」に注目したところに新鮮な味わいがある。肩にのるインコ咳く草城忌

東村山市 鈴木 忠

佐保姫の過ぎゆく音に目覚めけり  
初めての毛糸きりんに編むと言ふ  
出産の予定日誌す初暦

八王子市 徳永 松雄  
大阪市 今井 文雄

雪催けふからパンダあぬ国に  
ややくしき貌や眠らぬ熊となる  
アスファルト起す木の根や寒明くる

旭市 神成田佳子  
東京都 大武美和子  
宗像市 泉 勝明  
津山市 渡辺 牛二

## 枝しおり折

俳人の長谷川権さんによる朝刊2面の詩歌コラム「四季」をまとめた『四季のうた 太陽のひと』が刊行された。2023年4月から24年3月までの掲載分を取めた第18集。俳人・神野紗希の句「母乳ってたんぼぼの色雲は春」は、△この句、母乳は白いと思ひ込んでいたのだ△とし、△思い込みから一歩出れば世界は驚きに満ちている△と結ぶ。ウクライナの俳人、マイヤ・ストウジンスキの「耳詰まる／突如の静寂／雪は血に」など各月10作品の特集やシェークスピアの戯曲まで、古今東西の詩歌俳句を紹介する。巻頭には、戦後日本を代表する詩人・大岡信の類いまれな楽天性を評した書き下ろしエッセイ「太陽のひと」を収める。(中公文庫、880円)



長谷川権

長谷川権さん「四季のうた 太陽のひと」刊行



題字デザイン・イラスト 福田美蘭